



「神農祭」というお祭りをご存知でしょうか？毎年この時期に、大阪の道修町(どしょうまち)にある、少彦名(すくなひこな)神社で行われるお祭りです。
今回は、薬業に携わる当社にも縁のある「神農祭」とその神社について特集いたします。

少彦名神社って？

大阪市中央区道修町(どしょうまち)にある神社で、日本医薬の祖神「少彦名命(すくなひこなのみこと)」とともに、中国医薬の祖神「神農炎帝(しんのうえんてい)」をお祀りしています。このことから地元では「神農さん(しんのうさん)」として親しまれています。

●少彦名神社のご由緒●

道修町(どしょうまち)は、豊臣時代頃から薬種取引の場として、薬種業者が集まるようになっていました。江戸時代になると、幕府は道修町の薬種屋124軒を株仲間として、唐薬種や和薬種の適正検査をし、全国へ売りさばく特権を与えました。

薬は、人命に関わるものであり、その吟味は大変難しいものがあります。そこで神のご加護によって職務を正しく遂行しようと、安永9(1780)年京都の五条天神より少彦名命を仲間の寄合所にお招きし、神農炎帝王とともにお祀りしたのが始まりです。

(出典：少彦名神社公式HP「くすりの道修町資料館」より)



<こぼればなし>

神社の名前にもなっている少彦名命は、古事記や日本書紀など、日本神話における神様です。神話で有名な大国主(おおくにぬし)とともに、国造りに参加しました。諸説ありますが、御伽草子の一寸法師のような「小さな子」のモチーフは、この少彦名命が源流であるという説もあります。

神農祭って？

少彦名神社(神農さん)で、11月の22日と23日に行われる例大祭(れいたいさい)が神農祭です。例大祭とは、毎年神社で行われる祭祀のうち、もっとも重要とされるもののことです。

大阪の一年のお祭りは、1月の十日戎で始まり神農祭で終わるので、神農祭は「**とめの祭**」と呼ばれています。神農祭の両日は、通りにくす玉飾りや献灯提灯が立ち、神社で授与される張子の虎(神虎)を求める参拝客で終日にぎわいます。

時代とともに参拝者は増加し、**町の祭りから大阪の年中行事**へと発展し、「少彦名神社 薬祖講行事」として、大阪市無形文化財(民俗・平成19年)に指定されました。

張子の虎(神虎)

神農祭に際して有名なのが、**五葉笹につけた張子の虎(神虎)**です。神社で授与されるこの張子の虎は、神農祭のシンボルになっています。笹についた赤い札には「祈願家内安全無病息災」と記されています。



●張子の虎の由来●

文政5年(1822)に拡がったコレラは、「三日コロリ」といわれ虎や狼が一緒になって来るような恐ろしい病気として「虎狼利」と当て字されました。当時は、細菌学もなく、治療法などわかっていないのですから、疫病除けとして「鬼を裂く」といわれる虎の頭骨など10種類の和漢薬を配合した「虎頭殺鬼雄黄圓(こうさっきうおうえん)」という丸薬をつくり、初めは100人と限って効能書に一粒包んで施薬しました。同時に、病名も丸薬にも虎の字が当てられていたので「張子の虎」が作られ、五葉笹につるし、神前で祈祷したるしに虎の腹部に「薬」の文字が朱印され、病除け御守りとして授与されるようになったのです。

※施薬は、明治初期の「売薬規制」により廃止されました。